



《発行所》

青山同窓会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025-266-5268
FAX 025-266-5268
《編集、発行人》
上村光司
《印刷所》
オリオン印刷 ㈱
〒950 新潟市南出来島1-19-1
TEL 025-283-2151
FAX 025-283-3804

あいさつ

青山同窓会会長 50回 上村光司



今年も総会の時を迎えました。皆様元気な顔をそろえてくださることを、期待しております。世の中、悲観的に見ればキリがありませんが、ひとりの昏迷から抜け出して、新時代を築こうという活力が、各方面で出て来ているように感じます。

さて、このたびは何をおいてもご報告しお礼を申したいことがあります。これまで二千二百人前後で推移して来た年会費の納入会員が、一挙に千六百人近く増えました。

事の次第を述べますと――

母校百周年で作った同窓会名簿には、約一万二千人が載っています。平成十四年に迎える百周年に備えて、名簿の中間異動調査をしておいたかどうか。同窓会報は年会費納入者に届けているので、その他の同窓は母校や同窓会員の近況をご存じかどうか。異動調査に合わせて会報を送り、年会費納入のお誘いをしたらどうか。――こういう提言が仕事熱心な諸君から出されていきました。ただし、一万二千人が相手ですから、いつ出来るか、実施すべきかと思案しておりましたが、ここ数年、皆様のお力添えで会計の状況もすっかりして来ていたので、平成八年度で踏み切らせていただきました。

母校はいま正面を防音シートで覆われ、その陰で解体進行中。万感去来の図というところですが、その後ろでは仮校舎で授業が休むことなく進められていきます。プール建設、グラウンド整備まで含めた新校舎完成は平成十三年度、紀元二〇〇一年で、その翌年が創立百十周年となります。二十一世紀の新校舎を築しみにしながら、会員相互の親睦と母校発展への寄与という同窓会の目的に沿って、ご納入の会費の活用に心掛けます。同時に、会費納入会員がさらに増えてくれればありがたいと、願っています。

東京青山同窓会 新人歓迎会

毎恒例の「新人歓迎会」が、六月十三日（金）午後六時三十分より、東洋経済新報社ビル九階ホールで開催されました。この会は、今春首都圏の大学等に進んだ新人の同窓生を先輩方が温かく迎え、会員の親睦・交流を一層深めることを目的に、この時期に行われています。出席者の名簿を見ると、36回卒の斎藤英四郎名誉会長から今春卒業の新人の105回卒まで、実に七十年という歳月の流れがあり、改めて「青山」の歴史の重さを感じさせます。新潟からは、上村光司同窓会長、上杉雅之会計監事、石田瑞穂幹事長が参加し、また学校からは卒業学年を代表して田村裕、灰野正宏（89回）両教諭が駆け付けました。



あいさつの斎藤
会長(右)と返礼
の河原君(左)

斎藤伸雄（44回）東京青山同窓会長の挨拶、上村会長の祝辞のあと、紫授褒章を受けられた小池和男法政大学教授（59回）の講演がありました。欧米や日本の企業経営の形態を、特に人事管理の面から比較考察し、ご自身が高校時代にサッカーをやっていた経験を交えて熱弁をふるわれました。「日本の人事はず『現場』を重視する。これが日本企業の足腰の強さである。」という氏の指摘は、やがて企業の第一線で活躍する新人同窓会

員にも、大きな励みとなったのではないのでしょうか。歓迎のこトばが続いたのち、新人を代表して河原健太君（横浜国大）が返礼の辞を述べました。また、日下部朋子さん（82回）のウィットに富んだ司会ぶりも会を大いに盛り上げました。

懇親会は、斎藤名誉会長の乾杯に始まり、新人の皆さんは、普段接することのできない先輩との歓談を重ね、和やかな雰囲気の中に会は進み、高野剛君（慶大）のリードによる校歌・応援歌で締めくくりになりました。



商工会議所副会頭に 上原、橋本、両氏を選任

新潟商工会議所は7月1日に臨時議員総会を開催し、副会頭に新しく、同窓の62回上原明(新潟日産自動車株式会社社長)、66回橋本 誠(大川トランスティル株式会社社長)の両氏を選任しました。



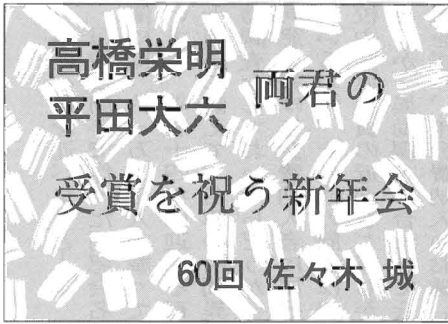
橋本 誠氏



上原 明氏

したいと思えます。

なおこの度の総会で、57回中野 進、58回遠藤整治、両副会頭は退任されました。ご苦勞様でした。



高橋栄明 両君の 平田大六 受賞を祝う新年会 60回 佐々木 城

昨年は青山60回生にはうれしい年で、高橋栄明君の日報文化賞と、平田大六君の藍綬褒章の二つの受賞が重なった。そのうち骨の研究で知られる新大医学部の高橋栄明君の受賞業績は、前号の会報で紹介されているので、ここでは平田大六君の藍綬褒章受賞のことを記したい。

平田君は広島大在学中に登山に魅せられ、郷里へ戻ってから三十年余り、自然公園指導員として飯豊連峰を中心に自然保護



と登山の指導、遭難救助に つとめてきた。現在は県山岳協会の理事長で、長年、本業の酒造業のかたわら、地道なボランティア活動の努力をつづけたことが今回の受賞の評価となった。

もともとが水泳選手で、会報に「ハイティーン水泳」を連載するなど多彩な顔をもつ彼は、昨年十一月十二日皇居での受章式で、褒章受章者を代表して御礼の言葉を述べる役に選ばれた。天皇の前で、独特の岩船なまりのことが豊明殿に朗々と響き、その大きな声をだれかがねぎらうと、彼は式場最後列に

マイクなしでも届く声を出したのだという。いい男である。

さて年明けて一月二十六日、高橋、平田両君の受賞祝賀会を兼ねた60回生の新年会が、村杉温泉環翠楼にて一泊つきで開催された。当日は雪模様だったが参加者は四十数名に達した。

幹事から受賞者二人に特製の新潟高校の校章をデザインした金盃が贈られると、村上市の大洋酒造社長が本業の平田大六君が、すかさず「この盃は校章入りだが、もしかして、高校生デモ酒飲ンデイヨ、という意味かな」といったので、大爆笑。

これより先、高橋栄明君からは、骨粗鬆症をめぐって学問的に興味深い話がいろいろあり、両君を囲む酒宴は時間とともに盛り上がった。一次会のあとも熱気さめやらぬ面々は、別室にセットしたカラオケ大会にのぞみ、演歌、懐メロ、軍歌、ニューミュージックと、わが60回生が生きてきた軌跡そのままに、七色の声の歌合戦となる。

しかしその喧騒も、夜半にはうそのように静まり、それぞれが寝息に夢を結ぶころ、青山の過去から未来へつづく一枚の白い画布がひろがるかのようになり、また新たな雪が、温泉宿を囲む六千坪の広大な庭に来て、音もなく夜のしじまに降り積もる。

母校を 退職して

63回 土屋信之

昭和五十二年に新潟高校に赴任いたしました。その年に、新一年生の学年団に入れていただき、その学年を卒業まで持ち上がっていくことになるのですが、その学年の学年主任は横山貞雄先生でした。先生は私が高校三年の時のクラス担任でいらしたのですから、真に有難いご縁と申すべきものであります。

爾来二十年、どれ程の事ができたのか心許無い限りです。高校の同期会(青山六三会)の折に、仲間から「母校の為に頑張ってくれ」と言われることが何度



もありました。有難うと答えながら、大した事もしていない自分に歯痒さを感じたものでした。しかし、同時に、この気持ちをバネに、もっと勉強しなければと自分を励ましたものです。長く在職して居りますと、

「近頃の生徒は(昔と比べて)どうです」などと、随分変わったでしょうというニュアンスで尋ねられることがあります。「そんなに変わっていないのでは」と曖昧な返事で勘弁してもらうこともありましたが、確かにかつかわらなくなってきている点もありました。多様な才能に恵まれ、こせこせした所がなく、おおらかであることは今も昔も変わっていないのではな

再び母校に 赴任して

70回 坂井政行

念仏寺の木立の緑が眩しい季節になりました。三十八年前本校に入学した頃も念仏寺の幽邃な趣に都会の中でのめずらしさも手伝って驚いたものでした。新入生歓迎会、応援歌練習、青

(次頁一段目へつづく)

(前頁よりつづく)

陵祭どれもこれもそれまでの中学では経験し得なかったもので高校生になった実感を強烈に感じさせるものでした。当時上級生はものすごく大きく見えまして。それと同時に新装なった本館の堂々としたたずまいと洒落た正面玄関、北校舎の白さと松の緑のコントラストを今でも鮮やかに思い出すことができます。

グラウンドは果てしなく広く、景勝五本松を挟んで左手は陸上競技用トラック、右手はバレーコートと野球場それにラグビー・サッカー練習場、もちろんあちこちに草叢がありました。スクラムの練習をしたのは五本松の下、草叢だっただけです。あの頃の青陵祭は陸上のトラックの周囲に八基、丸太を自分達で組んで敷敷にしておりました。ともかくも優越感と劣等感の激しい振幅を胸奥に隠し、すべてに背伸びをしていた高校時代が懐かしく蘇ってまいります。

それから二十数年後の平成元年、今度は教諭として母校で教鞭を執ることになりました。二十数年の風雪に耐えてかあの堂々としていた本館は色褪せて、壁は破れ床は剥げ見るも無残な有様です。白さを誇った北校舎も黒ずみ果てて昔日の面影を偲ぶ

よすがもありませぬ。しかし生徒は純真で真面目、ラグビーの試合で感じることですが、小兵が精根尽き果てるまで走り回るあの闘志とひたむきさは新潟高校ならではの素晴らしさと常々感心しております。それが健在であらゆる所であらゆる場面でこの伝統精神が息づいているのに誇りを覚えました。文武両道の校是の下、無限の可能性を秘めた生徒との交流は教師冥利



に尽きるものでした。

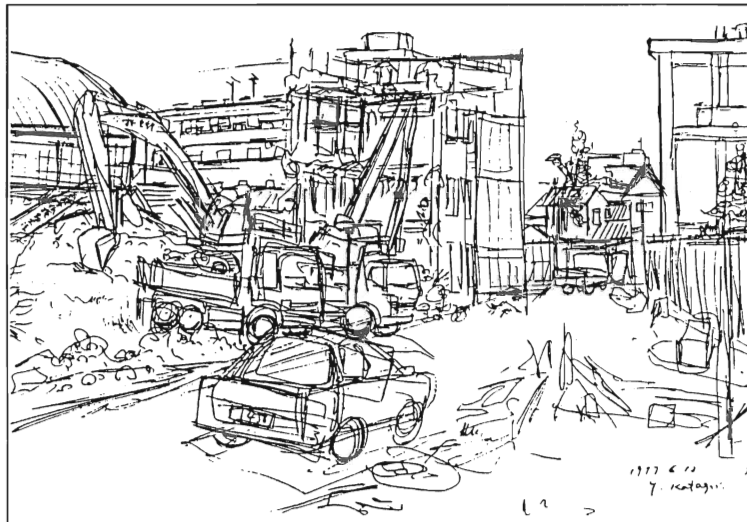
平成四年に他校へ赴任するにあたり、新たな職場での再生を期し新潟高校とは訣別したつもりでおりましたが、平成九年四月まさに青天の霹靂、再び教頭として母校に赴任することになりました。あれから二ヵ月、夏の到来と同時に改築の槌音が高らかに鳴り始めました。この青山の地に五階建ての校舎が聳立するのは間もなくでしょう。母校のさらなる発展のために尽力できる幸福を噛みしめております。同窓の皆様方のご協力をどうぞお願いいたします。

新潟高校通信制 に勤務して

68回 片桐靖孝

この四月に赴任いたしました。父の死と、転勤が重なり、少しごたごたしましたが、今は、母校に通い、仕事が出来ることの楽しさの方で、気持ちは前向きです。

なつかしさがよみがえる、松葉をかたどる校章、そして、格調ある校歌を口ずさみ、雄々



く声高らかに青山を歌うときの気分は又、格別なものがあります。

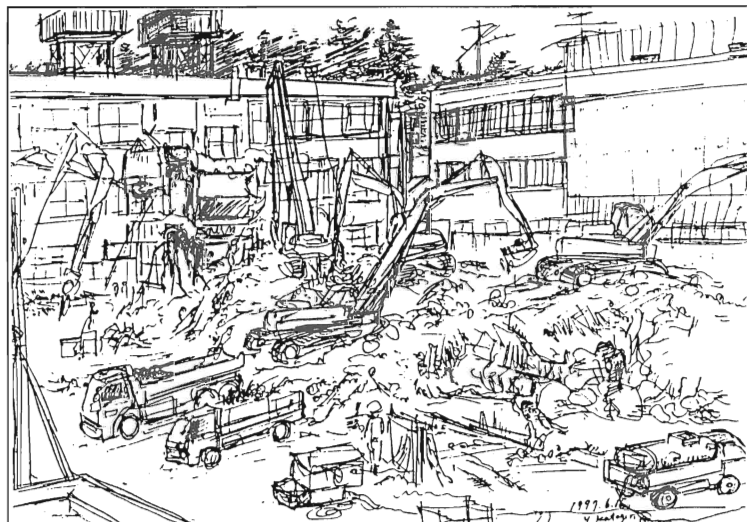
ところで、今本校では、全日制の校舎が全面改築の真っ最中で、この六月二十三日をもって(支関を含む)正面校舎が跡形も失くなりました。毎日、見馴れた校舎が、次々と変わって行く様は、何とも言えず、絵をかいたり、写真をとったりして

ます。さて、通信制の生徒諸君に接して、はや二ヶ月余りが過ぎ

全日制普通科と違い、年齢の幅があること。日曜スクーリング、月・火曜会。夜の各地区の学習会。生徒が単位修得の為に試験や義務時数。レポート提出を受けての添削等々。そして、

体育授業にいたっては、毎回の授業が五十〜百人以上と、人数が定まらず、狭い体育館で、臨機応変な対応を余儀なくされる即席授業です。

生徒会の活動が中心の行事等では、生徒諸君のまじめさと、積極的姿勢に感心させられます。そして、総在籍実数一〇〇四人



というのにも驚かされます。又、生徒が自分の生活に合わせながら登校し、単位修得の可能な通信制のよさを感じつつ、反面、生徒集団の変容にともない幅広い対応の必要性を感じているこの頃でもあります。

弔 辞

(一九九七年四月十日)
40期故小島松一氏の葬儀にて)

44回 田中勝治



一九三二年四月(六五年前)私は新中一年生柔道部員でした。当時は柔道部か剣道部かどちらかを選ばねば成りませんでした。小島先輩は五年生で私には大変恐い存在でした。或る日、小島先輩は一年生全員を校庭の一隅に集め号令しました。

「グラウンドの向こう迄のゴミを拾うて来い。嫌な奴は前へ出よ」私は前へ出ました。私一人だけ

でした。先輩は言いました。「田中は決断力があって良い。皆始め！」私は免除されませんでした。併し皆の前で賞められたことが嫌なゴミ拾いと帳消しと成ったことだけはたしかでした。

長ずるに従い、このことの教育的効果をつくづくと考えさせられています。

第一に陸上部でない柔道部員にグラウンドのゴミ拾いをさせる。そこから愛校心が育つでしょう。第二に、やりたくない根性を鉄拳でたたき直すのではなく「賞めて、やらせる」。事実、たまたきのめされるかもと覚悟したのです。それが反対に賞められる。これぞ教育の極致、真髓だと分かったのです。

あなたは偉大な教育者でした。そして柔道の偉大な教師でした。柔道場ではほんとに激しく仕込まれました。

吾々44期柔道部が全国大会で優勝戦迄進出出来たのは、この一年生の時に小島先輩達に徹底的に採まれたおかげです。私がおのの後東京外語柔道部主将をつとめることが出来たのも、この基礎を徹底して練習させられたおかげでした。

小島先輩、ほんとにありがとうございました。

全国大会は慶応大学の道場でしたが、40期の先輩達が応援に来てくれました。「さきざきを考えるな、この一戦を勝つんだと考えよ」この助

言は今でも鮮烈です。第三は上級生が下級生を指導する。このことは現在の先生達が忙しくてと云う学校の状況からして大変教訓的だと思います。多忙を極めている先生達がどれだけ助かるでしょう。

最後に柔道部後援会にふれま。県下中等学校柔道部大会に優勝し、いよいよ全国大会へと決まった時、小島先輩は二十年も先輩の横七番町の小山正道医師を会長に蒲原神社の宮司の金子康隆医師を副会長にして柔道部後援会を結成して下さいまし

小山つうぢ

故高橋是成君を偲ぶ

46回 江口松弘

小学三年生の作文がある。「小山のような高橋君にうさぎのような江口君がとびかかりました。やはりステンコロリとなげられました。」

これを書いた同級生は、例えのうまい文を書いてほめられたぞと思っていた。

激しい稽古と技の工夫が実って私は選手になり、すでに名手とうたわれていた高橋とは五分に戦えるようになった。重心が低く変わり身の早い私には彼の内股は通じにくかったのだ。う



さぎの私はもう、ステンコロリと投げられなくともよかった。私たちは全国中等学校対抗柔道選手権大会で優勝し、大きな優勝旗を抱いて凱旋した。柔道をやってきてよかったと、はじめて思った。

全国師範学校対抗柔道選手権大会は、決勝戦を迎えようとしていた。決勝に残ったのは、それぞれ強豪を破って両方の山を制した私の学校と、そして高橋の学校だった。実力伯仲と思われていた両校による決勝の帰趨は予断を許さなかった。

中学校を卒業する時、高橋も私も教師になる道を選んだ。しかし行く学校が違った。部の生活や私生活でも寝食をしばしば共にし、悲喜を分かち合った二人には皮肉な現実だった。私は正座してま向っている高橋を見た。彼はニコツとしたようだった。

結果は三対一で私たちが負けた。「一勝を先行されたのだから、勝たねば」と思った時、すでに負けていたのかもしれない。高橋のかけた内股は軽いようだったが、私はみごとにひっくり返っていた。

惨敗にうちひしがれていた私たちの控室の入口に私を呼ぶ者がいた。高橋だった。「江口かんなべな」、彼は私の肩に手を置いて、そして帰っていった。彼の控室は優勝の興奮で湧いてるはずだった。あついものが胸を流れた。私は負けて泣いたのではなく泣いた。友情に泣いたのだ。

うさぎはやはり小山に通じなかった。しかし私は山よりも大きなものを得たように思う。その高橋も今はいない。彼の冥福を祈るばかりである。

注——この文は、以前外部に発表したものに補筆した。新しく筆を下ろすことがどうしてもできなかった。故人に深くおわびしたい。

おねがい
編集部より

会員の消息等については、編集部では、常に心がけておりますが、何分多くの会員の動向は完全にはつかみきれません。会員の皆様には、ぜひ同期生あるいはクラブの先輩・後輩の慶弔について、一筆お知らせいただきたく、御願いたします。

各方面でご活躍の同窓各位の業績などを、友人・知人からお寄せいただくことで、会報紙面を幅広く、豊かなものにしたと考えています。

追悼 和田迪雄さん

青山同窓会副会長
69回 敦井栄一



去る五月二十六日に亡くなられた青山同窓会 前副会長の和田迪雄先輩(55回)に心から哀悼の意を捧げます。

温厚篤実なお人柄と、卓越した見識、偉大な統率力、経済界での毛並みのよきを見込まれて、新潟青年会議所が地方都市で初めての全国大会を開催するに当たり、理事長として、立派にその責を果たされました。以来青年会議所でも青山同窓の後輩たちをいろいろご指導いただいたものでした。

また日本石油の特約店である

和田商會を中心に和田グループの総帥として、社業の発展に尽くされますとともに、商工会議所では長らく副会長として新潟経済界発展のリーダーとして活躍をされました。

実業界代表としては、新潟証券取引所の理事長をはじめとして、数々の公職を歴任されまし。高齢化社会でのあまりにも早いご逝去を痛み心からご冥福をお祈り致します。

この文章は、東京青山同窓会の「東京会報」第21号より許可を得て転載させていただきました。

寄稿 思い出

27回 内山惇一

1915年頃、郷里中蒲原郡庄瀬村から新潟市へ行くには、村の東側に流れる信濃川を汽船安進丸で2時間半程下るか、もしくは小須戸町で川を渡り国鉄矢代田駅から沼垂駅へ行くかの2つしか方法が無かった。安進丸は、船腹の両側に大きな水車を回して進むというのどかさで、真ん中が機関室、前後に畳敷きの2つの部屋が在り60名位は乗れた。大郷、鷺巻、酒屋などの船着き場が両岸に在り、下りの船は、船首を上手に回してから着岸するというのんびりぶりだった。どこから乗り込んできたのか、明荷を担いだヤシと呼ばれる男が股引などを並べて叩き売り口上を張り上げていたかと思ふといつの間にやらどこかへ消

えてしまうというような事も川蒸気の名物であった。汽船のこを川蒸気と呼んでいた。新潟では万代橋終点の手前の白山浦で下りた。鍵富邸、県議事堂、白山神社を左手に、右は裁判所、医専の運動場から学校町通りの一本道、右側には北光社書店支店、次いで県立女学校(現県立中央高校)、それから天神様とか関屋小学校が在ってわが中学である。

上手は関屋へ行く緩い上り坂で、念仏寺やその裏の豚小屋位しか当時建物は無く森閑たるものだった。裏手はずぐ松林、それから低い砂山が二つ、その先は砂防すだが二、三段あって百メートルの砂浜であった。新潟港の方へ行けば測候所、ついで師範学校があり、日和山となる。左手は砂丘の陰に豚小屋が点在し、程なく競馬場の木柵であった。学校の北側は裏の砂山へ続く小径で、途中にロスケパソと呼んだ小屋が一つ。まことに荒涼閑静の風景であった。校舎も寄宿舎も木造二階建て、校庭には松の木が植えられていた。成程、男の子と杉の木は育たないといわれた土地らしい模様であった。ただし、裏の校庭の片隅にポプラ並木があったことも記憶している。

中学は各学年百五十名だったので、全校七百の健児と言う事になり、「霞棚引く青山の」と威勢の良い合唱となった。時の校長は、小平高明で県では数少ない奏任官待遇で堂々たる体格ぶりだった。式日の講堂にナポレオン帽を二つ折りにして小脇に抱え、金モールの礼服に式刀を腰に入場する様は見事な偉丈夫ぶりであった。校長には生徒の顔姓名を記憶する特技があった。何の時間でも教室に入ってくる。体操の時間も良く現れたりして学年の終わり頃には殆どの生徒の名前を知っていた。修身の補講が大好きで、記憶に残る講義であった。その日の課題は「建設と破壊」だ。どういう意味か?と全員に聞いた。全員の答えを駄目だという、そして組み立とぶち壊しだと教え込まれた。また「黒という色の種類は?」と聞かれて全員落第。答えは、一番薄い黒は瓶のぞき、一番濃いのが殿様黒と教えた。へそがかいと何やら面白い話でも聞いた心持だった。寒い冬の午後、天神様辺りの焼き芋屋で焼き芋を新聞紙に包んでの帰り道、下校する小平校長がやってきた。緑に赤線の入った制帽をとり、停止敬礼である。すれ違いきまに「内山、美味しそうだな、冷めないように急げ」

と一本やられた。この校長マラソン好きで、当時のオリンピック選手の金栗四三を招いたり、全校マラソンで白い兵児帯を履いて大野までの全行程をも完走した。当時は愛知一中にも日比野というマラソン校長がいて評判だった。私はこれが大の苦手。関屋をスタート、校門前を白山浦へ。物産館と白山様の間を右折すれば程なく堤防の一本道だ。何とか脱走と思つた途端、白い兵児帯の小平校長が「内山、さあ一緒に走ろう!」と並んでしまふ。平島辺りで苦心惨憺、何とか落伍。落人の苦勞が偲べられたものだ。

四年生の時小平校長は仙台中へ。後任は短軀禿頭の三根円次郎校長となった。短い体にスベッキを振り回しての姿は立派な渾名を奉つたものだ。三根校長は、英才教育方針で全生徒を成績順に甲乙丙と三分した。だから腕白の面白い連中は丙に集まった。乙組に居合わせた私は新学年の度に、机を引きずって甲へいたり、乙に戻ったりしたが、お陰で仲間が増えた。この三根校長の傍が後年ジャズで名を高めたディック・ミネその人である。泣くな妹よとか何とか、我々音痴の先輩の耳にも流れてきたから面白い。



と一本やられた。この校長マラソン好きで、当時のオリンピック選手の金栗四三を招いたり、全校マラソンで白い兵児帯を履いて大野までの全行程をも完走した。当時は愛知一中にも日比野というマラソン校長がいて評判だった。私はこれが大の苦手。関屋をスタート、校門前を白山浦へ。物産館と白山様の間を右折すれば程なく堤防の一本道だ。何とか脱走と思つた途端、白い兵児帯の小平校長が「内山、さあ一緒に走ろう!」と並んでしまふ。平島辺りで苦心惨憺、何とか落伍。落人の苦勞が偲べられたものだ。

自衛隊の医師として

82 回 関 修司

私は、昭和五十年に防衛医大に第二期生として入学し現在、防衛医科大学校研究センター外傷研究部門で重傷感染症や、外傷など侵襲の免疫病態を主に研究している。

最近、新潟県から防衛医大に入る人が少ないと聞いており、同窓会誌への寄稿の機会に私のこれまでの経験をたどりながら、防衛医大や自衛隊医療の一端を紹介したい。

私の高校三年の同級生である楠見嘉晃君（現日大病理）が現役で一足先に一期生として入学しており、実情を良く承知していたため抵抗なく入学でき、新潟高校からは計四人入学した。

学生時代は語学は好きだったが、数学が大の苦手で高校三年のクラス替えでは文系クラスに行く予定であったのを直前に理系クラスに変えたのを良く覚えている。

防衛医大に入った私の大学生活は、年に二週間程度の訓練と古めかしい制服を余儀なくされたが大学生活は充実しておりテニスに明け暮れ週末には友人たちとよく酒を飲み、（少しは勉

強もした。しかし数学ではやはり留年の危機）また、人生や将来について同級生と深夜まで議論し、全寮制の生活もそれはそれで楽しかった。

専門課程が始まり数学との縁が切れるとさらに学生生活は充実した。（もしやとは思っていたが、微分積分を使ったことはやっぱり医者になって十数年一度もない。）

卒業後は幅広く病気を診られることと、もともと子供が好きだったため小児科を選んだ。（本当は好きな分野が決まればその内、科に行こうと思っていたのだがそれが決まらなかったのである。）

医師となって六年目に自衛隊仙台病院に赴任した私は免疫学の魅せられ、研究の道に入り暇な時間（自衛隊病院は基本的に隊員とその家族だけを診るので時間的にやや余裕があった。）

に東北歯学部の大熊勝男教授の研究室に通い、そこで私にとって最も大切な出会いがあった。当時アメリカ留学から戻られたばかりの安保徹先生（現新潟大学医学部医動物学教授）のも

とで研究を始めることになったのである。



とで研究を始めることになったのである。先生は非常に独創性にあふれた方で、二番煎じを嫌った。一番面食らったのは、英語の論文を読んでいると『関、勉強するな無知のままではいられない！』とよく言われたことである。今になってみると、独創性の大切さを先生独自の言い回しで言われたのだと実感できるが当時、文字どおりの免疫学に無知だった私には勉強している自分が窘められるのが不可解だった。しかしながら、そこで先生と共に肝臓におけるTリンパ球の胸腺外分化を発見したのである。欧米中心の免疫学の常識に反旗をひるがえす発見だった。私の無知が少しは役にたったのかもしれない。この辺りのことは、最近出版された『未来免疫学』（安保徹著、インターメ

ディカル社）に詳しく記載。私は患者さんを診るのも嫌いではなかったがその後一、二年は寝ても覚めても実験のことばかり考え、研究に専念したいと思うようになった。安保先生が、新潟大学の教授に就任された翌年、平成三年から米国カリフォルニアのサンディエゴ近郊のスクリップス研究所に自衛隊から公務で二年間留学させてもらい、免疫学の分子生物学的手法を勉強した。帰国後、二等陸佐（旧軍でいうと中佐）となった私は自衛隊仙台病院で二年間小児科部長をする一方で、東北大学の大学院生の人たちの論文を書くお手伝いをし、平成七年三月に熊谷教授が退官されたため研究を続けることができなくなったこと、私は自衛隊の部隊で勤務したことがなかったため、新発田自衛隊の医務室の長として八月に赴任した。

また、少しばかり親孝行もでき実に貴重な一年だった。こうしてみると、自衛隊に入らなければ仙台での勤務や安保先生に会うこともなく、新発田で自衛隊員とともに勤務することもなかったわけである。

職員の異動 (平成九年四月)

現在私は、自衛隊の制服を脱ぎ、母校である防衛医大の教官（助教）として勤務をしているわけであるが、自衛隊で得た経験も捨てがたい物があったと実感している。

全日制 退職	転出	転出先	全日制 転入	転入先
教頭 桐山 元	津川 高校長	教頭 坂井 政行	主事 宮田 都美枝	県出納管理課
教諭 関 一英	村上 高	教諭 須佐 幸平		
教諭 樺沢 奥雄	退職	教諭 中村 健郎		
教諭 中野 則雄	新潟江南高	教諭 田辺 信夫		
教諭 石黒 勝則	新潟高	教諭 船木 忠史		
教諭 長谷川 雅一	津南高	教諭 堀 昌明		
教諭 加藤 徹男	高田北城高	教諭 成田 守		
教諭 荒木 勉	柏崎高校小	教諭 野沢 健一郎		
教諭 山中 直樹	国分校教頭	教諭 佐藤 克子		
教諭 土屋 信之	巻工業高	教諭 伊藤 敏		
教諭 仲川 幸子	高等学校教	教諭 高橋 庄次郎		
非常勤講師 児玉 卯栄之	育課指導主事	教諭 藤木 隆男		
非常勤講師 片山 達雄	教育センター	教諭 宮川 康代		
教頭 田中 栄三郎	教科教育課長	教頭 横山 邦夫		
常勤講師 小熊 洋一	退職	教諭 片桐 靖孝		
常勤講師 大谷 智子	加茂高	教諭 古田 裕		
主任 小林 綾子	退職	常勤講師 有田 史花		
		非常勤講師 堀之内 高		
		非常勤講師 佐藤 悦子		
		主任 南場 正		
		主任 奈良 靖子		
		主任 新津 土木		
		主任 泉 統計課		

青山の教え子有志の会編 文集『池先生を偲ぶ』が 出版されました

出版されました

67回 永井健司

池政栄先生が八十二才でお亡くなりになられて、今年の六月七日で満四年が過ぎました。昨年の春から準備して、その御命日に編集委員が御仏壇に出来上ったばかりの本を奉納しました。A5版変型、五一三頁、スクールカラーのエンジ色の布表紙には渡辺秀英先生の揮毫と松を形どる校章が映え、池先生もきつと天国で喜んで下さったに違いありません。



まら虫物語も含まれている他、随筆、講演記録などが先生の偉大さを感じさせずにはおきません。

昭和二十年九月終戦後すぐ母校で有る旧制新潟中学の教諭となり、初めて担任したのが56回生、そして我々67回生が池先生が学級担任をした最後の生徒でした。最終学年を池先生から受け持たれた生徒の他、特に先生と親しかった関係者に原稿を依頼した所、六十名近い方々からの寄稿をいただきました。先生が東京で教えた事のある小説家杉本苑子女史からも、長谷川新潟市長からも、一教え子と云う事で原稿をいただき、寄付もいただきました。

ほぼ半分が池先生の遺稿で、その中には縣實応募小説「あら

二百数十名以上の方々から御寄付をいただき三百部作った本も残り少くなり、増刷の事も考えなくてはと思っている所です。池先生の遺徳の大きさといい、青山同窓会の底力を感じさせられました。山本隆一郎(56回)先輩を初めとする編集委員各位の努力と、原稿を送り、御寄付をして下さった同窓生の方々に心からお礼を申し上げます。有難度うございました。

連絡先 67回 永井健司

〒951

新潟市本町通七番町一、一四六
電話〇二五(二二九)三〇〇一

60回有志の長江三峡下り

60回 小林智明

六十回生有志が昭和六十二年

に渡辺秀英先生に引率されて、中国安陽郊外の甲骨文字の殷墟、古都洛陽と龍門石窟、唐の都長安(現、西安)の華清池や兵馬俑坑、乾陵、永泰公主墓、西安国修学旅行は十年の昔となった。

今年平成九年六月、今度は有

志十一名(高橋貞夫、内山真一、司山次夫、田辺寛、藤本剛、西脇満、小林智明、泉精司、佐々木城、熊谷忍、高城英雄)に同行夫人が六名、夫人のみ同行が二名の計十九名。それに友人関係など五名の合計二十四名の一行が、長江三峡下り、万里の長城、大同の雲崗石窟を旅行した。

六月二日、成田より上海経由

で重慶着、泊り。翌三日は重慶郊外の大足の石佛を見学。四日は重慶市に戻り、鶯嶺公園に蒋介石の旧居を訪ねたり、有名な四川料理の火鍋、薬膳料理なども賞味した。

その夕三峡下りの長江明珠号

に乗り船中三泊。三国志で名高い白帝城や、瞿塘峡、巫峡、西陵峡の名勝と史跡の長江下りを楽しんだ。また船中偶然、司山君の誕生日の夕、船内レストランの我々のテーブルに、大きなデコレーションケーキが飾られるという船長の素晴らしい贈り物に司山君大いに感激、祝杯に酔った。

しく記念すべき中国旅行となった。これは偏に道中我等の面倒をよく見、無事に旅程を進めてくれた海外旅行開発(株)の高城社長のお蔭であったことに感謝したい。終わりに旅中口占を二首。

向三峡

万里禹邦探勝游
同朋待夕登渝州
船中相酌向三峡
朝見蜀吳來往舟

登白帝城

昔聽今登白帝城
雲來眼下大江橫
謫仙詩聖甲何処
遠客空吟万里情



白帝城より瞿塘峡を望む

上海にて
七日に沙市にて下船。荊州古城を見学して武漢へ。夕刻空路北京に飛び、北京ダックの夕宴後、万里長城組は北京泊り。雲崗石窟組は夜行寝台列車で大同へ向かう。
二手に分かれて八、九、十の三日間を観光し、それぞれに中国四千年の歴史の一端にふれて感動。十一日再び合流して空路帰国した。
同期生一行の旅は何よりも楽

応援歌

「ただに血を盛る」
について

50回 田中賢治

「ただに血を盛る瓶(かめ)ならば」

で始まる応援歌について、田中賢治さん(50回)から次のようなご教示をいただきました。

* * *

ご存じの方が多いとは思いますが、この歌は講談社文庫の「日本唱歌(下) 学生歌・軍歌・宗教歌篇11 金田一春彦、安西愛子編」(昭和五七年五月初版)に四高南下軍の歌として掲載されています。またキングレコード一九六七年LP「なつかしの寮歌集」でポニー・ジャックスが歌っています。

講談社文庫の解説によれば、この歌は明治四十年四月に生まれました。金沢の四高は前年に寮の一部が焼けたり、気分の沈滞することがあり、そこに正力松太郎や河合良成らが、京都三高、岡山の六高を相手のスポーツ南下大遠征を計画し、このとき出来たのが「ただに血を盛る」でした。ほかの学校にまで広まっ

(次頁一段目へつづく)

(前頁よりつづく)
て歌われたのは、この歌が随一
だとしています。

わが応援歌は、この歌の二番
最後の行「遂に南下の時
刻を」を「奮起」に置き換えた
だけで、一番、二番そっくり借用
したかたちです。ただし、原
詞と同窓会名簿に収録されて
いるものとは幾つか違いが
あります。口伝えに引き継が
れていくうちに、同音異語が
入ったり調子が変わっていく例は
多いのですが、気が付くところ
を拾うと次のようになります。
(先が原歌詞)

高打つ心臓の ↓ 高鳴る胸の
霊の響を ↓ 弾の響を
(魂の響を もあり)
不滅の真理戦闘に ↓ 先頭に
他の応援歌にも、誤字を含
め、おかしいと感じるところ
があります。

第九期大会 新春に 並ぶ新年会 の集い

59回 安倍邦造

伊佐 修学年幹事、佐藤 進
囲碁倶楽部会長の骨折りで標記
の会が二月一五日、新潟市明石



一のニュー越路で開催された。
午後一時半より囲碁大会。大
会は昨年に続いて二回目。まず
前回優勝の菊地晴彦初段から優
勝カップの返還が行われ、参加
者一二名による対戦が行われた。
熱戦の結果、谷博之六段が、
四戦全勝、堂々の貫禄勝ちで優
勝カップと渡辺幸雄君提供の副
賞置時計を獲得した。
終了近くになると、基会には
参加しないが、新年会に出席す
るメンバーが続々と集まって来
てにぎやかになったところで基
会もお開き、引き続き新年会とな
った。
参加者は総勢三二名、えび茶
に松の校章と「青山同窓会 五
九期同期会」と染め抜いた旗の
下で校歌斉唱から始まって賑や
かに開会。結構初参加などの人
もいて「あんた〇〇君だったよ
ね」など交流が進んだ。しばら
くすればすっかり昔にかえって



卒業後四十六年の溝はたちまち
解消した。

メンバーには苦心の労作を自
費出版した川上昭八郎君の「よ
り道」、関根彰圓君の「NHK
朝の随想」の本が紹介され、現
在同期生の間で回読が進んでい
る。その他リタイヤして悠々自
適の人、第二、第三の職場で実
力を発揮している現役組などい
ろいろで、結構面白い年代にな
ってきて話題は尽きない。

宴もたけなわになった頃、ア
トラクションとして幹事が苦勞
して集めた「越の寒梅」一〇本、
これの争奪戦がなんと童心に返
った「ジャンケンポン大会」で、
勝って喜び負けてくやしがるそ
の賑やかなこと、はたから見
て何んとも無邪気な光景であ
った。

又、此の企画の中に、現新潟
県サッカー協会副会長の大川健

君より二〇〇二年ワールドカッ
プ新潟大会に向けて、よもやま
な話を聞く予定であったが、当
日、急に体調を崩し急遽欠席と
なり次回にお願いする事にな
ったのが残念であった。

楽しい一時もたちまち過ぎて
閉会の時間となり、次回は幹事
のご苦勞をお願いしながら、三
三五五夜の街に散っていった。

67回 江ノ島で同期会

六月十四日江ノ島の「二見館」
で四年ぶりの同期会が開催され
た。今までは、五年毎に行われ
ていたが、お互いに年を取った
し、できるだけ毎年やろうとい
うことで、行われた。福岡や、
大阪、新潟などに地元東京を併
せて、二十九人が参集。乾杯の
後自己紹介。近況報告では、リ
ストラ後の第二の職場のこと、



独立したこと、家族のこと、健
康のため、新宿から日本橋まで
歩いて通勤していること、嫁に
行かない娘に駆け落ちを進めて
いること、女房に逃げられてシ
ングルになったこと、女房から
逃げてシングルになったこと、
夫婦睦まじく山登りなど楽しん
でいること、などなどさまざま
な人生が語られ、皆はしばしば酒
を飲むのも忘れて静かに聞き入
っていた。別室での二次会では、
欠席者から届けられた「越の寒
梅」や「鶴の友」を傾けながら
さらに話が弾んだ。来年は新潟
で会合を決め、翌日は希望者で、
鎌倉を散策して散会した。

予告

山岳部OB会

毎年恒例となりました山岳部
OB・現役交流会も回を重ねて
第4回となりました。

昨年はOBの参加がとつても
少なく寂しいような、なぜか
「ホッ」としたような会でした。
登山当日は快晴で、全員無事登
頂。(約一名はバテバテ)

さて今年も、9月20日(土)、
21日(日)に巻機山で行ないます。
お問い合わせは、高校の藤田先生、
又は、オリオン印刷(株)の石沢
です。OB諸氏の参加をお待ちし
てます。

青山

バスケット

ボール

78回 山口正人

二年程前の夏、同期でバスケッ
トをいっしょにやっていた、新
発田のテラオフィットネスクラ
ブの寺尾君と現役選手の筋量を
増すためのウエイトトレーニング
などを話しているうちに「後
輩に指導に行こう」という事
になり、八月の下旬、男女バスケッ
トクラブの一、二年生に、二人
のインストラクターと共に、講
習と実技を三時間半に渡り、指
導していただいた。その後、こ
れからの課題などを聞いたこと
ろ、他校と比べて、ウエイト
トレーニングの器具が少ないとい
う指摘であった。実際に、実技
指導は、ダンベルと重量の変え
られないバーベルなどしかなく、
相当な知識のある人でないと筋
力をつけていく事が出来ないで
あろうと、私ですら思えるもの
であった。

そこで、体育教官室の先生方
とも話し合い、どの様な器具が
必要か、寺尾君にリストアップ
をお願いし、学校として購入が
(次頁一段目へつづく)

(前頁よりつづく)
可能か検討していただく一方、クラブ(OB、OG会)として援助が可能かクラブ役員で話し合った所、前年に行われた創部70周年記念事業(能代工業との記念試合等)で、現役男子のユニフォーム代(女子には寄贈)が、まだ作ったばかりという事で、プールしてあり、それを充当し、他の運動部OB会にも呼び掛けていこうという事になった。

ところでウエイト器具は、けっこう高価なもので、我々の予算で効果的に揃えるために、メーカーと直接交渉したり、中古情報などを集めてもらったりしてバーベルセット

- 180kg 2セット
- 140kg 1セット
- バーベルシャフト 1本
- ベンチプレス台 2セット
- ベンチプレスセーフティーガード 2セット
- スクワットラック 1セット
- ベルト 3本
- スミスマシン(中古) 1セット
- ラットマシン(中古) 1セット

総額約80万円の、リストアップされた器具を、順位を付けて購入しようという事になった。

九月に入り、活動している主な運動部OB会の中で、サッカー部62回星野陸夫さん、野球部71

回中野 久さん、ラグビー部80回阿部哲夫さんに電話で連絡を取り、器具購入の共同援助と各チームとコーチへのトレーニング指導(無償による)を話した所、各OB会ともすぐに共同援助に参加の返事をして来られ、又学校からも寄附が入り、九月中旬から十月末にかけて、器具を揃える事が出来た。そして、トレーニング指導の方も、寺尾君とスタッフにより九月中旬より各運動部、ワンダーフォーゲル部などに順次数ヶ月に渡り行

青陵祭昔々

校内幹事 69回 山田 栄

四月、新年度が始まって桜日和というには暖かすぎるような陽気がくると、ふと何かを忘れていたような気分になる。目が松林を越えて青い海と空、その先の未知なるものを探し始めると、これはもう青陵祭である、なんて。

「お前さん達の青陵祭のがあるろ。一体どんなもんなんだか書いてみなせや。」青山同窓会上村会長のことばに従って書いてみる。ただ、「一体どんなもんなんだか」、どれだけ伝えられるか。自分でどれだけ理解しているか。とりあえずは自分の

われた。又、このシーズンオフに指導希望して来る部が多いのではないかと予想している。ところで、母校のチームを、「おっかけ」の様に試合を見、たぶん後輩達以上に喜んで悔しがったり、そんな所にもいるのがわかり、そんな「ばか」(私の恩師のコーチに時々言われる)が増える事を祈ると共に今回の関係者の御協力に感謝いたします。

このやもめクラスの男子生徒が「下級生の女子と口をきくために」と考案されたのが連合制なのです。」

「今では青陵祭に不可欠となった枚数は、昭和29年から使用されるようになりました。枚数・バックを作るという現在の形がほぼできたのは昭和38年頃です。当時は建設会社から丸太を借りてきて、自分たちで組み立てていました。そのため、各連合ごとに形も大きさも違い、徹夜で組み立てをしたときもあつたようです。昭和44年からは業者にお願いし……」

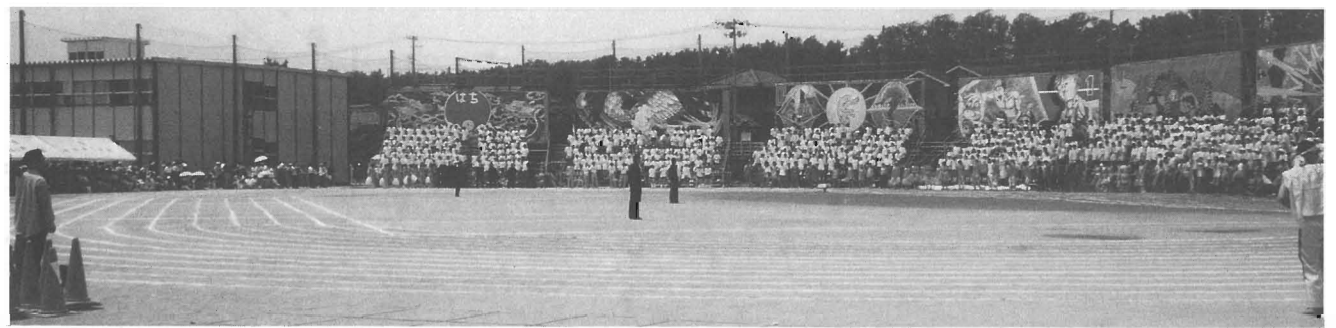
「連合創造が青陵祭のメインであるといっても過言ではないでしょう。連合創造は、各連合が「主張」を持ち、連合メンバーの身体を用いて表現することで。その歴史は青陵祭開始当時までさかのぼることが出来ます。10分間応援と5分間応援からなる仮装応援のうち、10分間応援が連合創造にあたります。昭和49年に仮装応援から連合創造が独立し、現在の形となりました……」

云々という。私は昭和35年の青陵祭で自分の連合の仮装責任者であつた。演技時間は20分だった。その時間を想定してストップ・ウォッチ片手にシナリオを書かなければならなかったから、よく憶えている。枚数は、ごく一部建築会社に話をつけて資材を借りてくる連合があつた程度と記憶している。他は教室の机イスを持ち出し、バックには竹竿を立てていた。36年のタイム・トリップである。

まず作業日程。授業は一週間位前から午前だけになり、午後から準備ということになったはずである。ただ、そのことはあまり重要ではない。なにしろ、我々は当時自分たちで授業を組んでいたようなものだったので(教科担任に交渉して時間を変更してもらおう。あるいは自習にしろ。空いた時間を準備に回す。)

普通の準備帯の場合はこう。午後三時過ぎに放課になるとまづ海へ泳ぎに行く。五月末の海は冷たいことが多いが、多分に儀式的な意味合いを含めて泳ぐ。海に落ちる夕日を背に帰つてくると、作業所になった教室のゴザの上で浜風を受けながら一休みする。灯ともし頃に目をさますと今度はタイミング良く「炊き出し」の「差し入れ」が出る。それを処理して、一時間ほど各部門の仕事の進行状況を見て回つて、帰る。九時か十時ころ。あるいは、急に夜になって仕事(次頁一段目へつづく)

「昭和27年当時の三年生七クラス中五クラスは女子生徒のいな通称「やもめクラス」でした。



(前頁よりつづく)
はかどりだしたりすると、急遽泊まり込みという場合も。

誤解のないように少し説明を付け加えて頂く。私は責任者だから、特定の作業がなかったということが第一です。各部門ではそれこそ泳いでいるひまなどなく、夜遅くまで働いていました。また私は冷たい海で泳ぐのはあまり好みではなかったのですが、一緒に行って連れて帰らないと仕事をしない連中がいたので。そして泊まり込みはもちろん当時も禁止でした。

ただ、まだ宿直があった時代ですし、先生方もそれほど神経質ではなかったということのようです。実際泊まったのは学年で何人もいなかった。見つけれられて午前一時頃に家に追い返されたり。

「炊き出し」については、当時は完全なボランティアです。家が近い女子の家庭が犠牲になりました。定番の握飯をベースに、結構いろんな料理にありついたものです。例えば植木尚子さんは年始の客に毎年二百人分からのものをつくるから、と母上を先頭に見たことのない食物を運んでくれたものです。バットという容器を初めて知りました。

その後、この炊き出しは不公平感と費用の問題から、一母親の

会」が規則を定めて運用することとなり、更にその後には全面廃止となったと聞いています。少し冷静に考えればまことに合理的な慣例ですから、当然の運命ともいえるのでしょうか、惜しいものがなくなりました。

さて、一体いかなるものをして、「創造」したか。

テーマが必要で。演技時間は20分。会議を開いてはアイデアを出しあい、主としてお互いの案をけなし合う。私が、自分の案がないのに人のに文句をつけるな、と怒り、長谷川治子さんが(昨秋逝去と聞く)、あの特徴的な目をくるくるさせて、そうね、その通りねと謝り、と

いった紆余曲折の末、結局「古代オリンピック」というタイトルに落ち着いた。決まってみれば、それにストーリーをつけ、細部を膨らまし、作り物を設定するのは驚くほど早く、うまくいった。この経験から、私はその後常に、アイデアは個人にまかせろ、みんなその夢に乗れ、と言いつづけている。青陵祭の仮装だけにしか通用しないことかも知れないが。

仮装といえば馬です。三学年縦割りの連合といえ馬の足は一年生に決まっています。古代のオリンピックにチャリオット

の戦車競技がないわけがないではないか。何しろ、シネマスコピーの時代です。「十戒」から始まり「ベン・ハー」へと、夢中になって観た映画の、お手本には事欠きません。というわけで

大道具の石本隆太郎君は敵味方十頭ずつ、二十頭の馬を作らなければならなかった。それはいい。結果としては見事な馬がそろった。問題は戦車。ちやちなものは作りたくない。敦井栄一君が耳寄りなことを聞き付けてきた。新潟市役所が清掃車を廃棄処分にするのだという。たち

まち戦車が二十台そろった。木製で、幅がリヤカーの半分くらいで、とにかく我々の戦車用にあつらえたような代物であった。石本くんの仕事はボール紙で金ピカの模様を周りに張りつけるくらい。今でもあのタイムングのいい幸運が信じられない思いです。

数十頭の馬を並べた戦車競技となればそれ相当の「音」がいる。ここは丹羽英介君の出番です。つて(兄貴)を頼ってBSNへ。音のライブラリーにあつた一頭の馬の走る音を重ねて重ねて。背景となる観客の歓声には「バカヤロー解散」の録音を使った。ヤジ・怒号を織り混ぜた申し分のないものができた。何といっても作り物の最大は

ギリシャの神殿です。その前で全ての競技が行われる。これも石本君の担当。精一杯に頑張つて幅十メートル、高さ五メートルのものを作ることに。うち柱の高さが二・五メートル、屋根が二・五メートル。柱は当然エントランス。美術で習い、世界史で習い、修学旅行の寺で聞き。そこまで凝らなくても自分でも思うくらいにやりました。屋根の部分は体育館で作った。傍らに馬の張りぼてを二十頭並べて、わが連合の一面はさながらスベクトル映画のセットのようにみえたものです。本番二日前に完成、外で柱と合体させる段になって体育館の出入口から出せないことが判明する。

巨大なオデンのコンニャクの様な三角の物体を四つに分割して出し、外でつなぎ合わせることにした。それを最後に四本の柱の上に載せて立たせる。前日の、いや青陵祭当日の午前二時までかかった。プレハブの屋根に乗り、高橋義教君の8ミリ映画のライトを投光機代わりに使い、黙々と作業した。十数人で取り組んだが、見守る先生方の数の方が多かった。「だって、間に合いませんから。」という論理が通用して、特に叱られた記憶はありません。

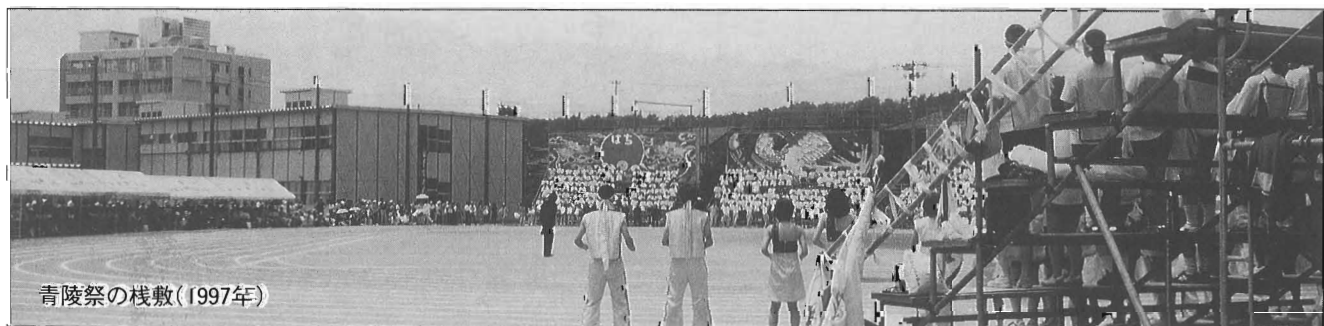
その年の青陵祭は快晴。白亜のバルテノン神殿は青空に映えて他を圧してその威容を誇っていた。走者が、聖火に見立てた赤い発煙筒を掲げて正面を駆け抜けたとき、期せずして観客からため息がもれました。これだれが走ったか……憶えていない。

本番直前にひらめいたことが一つ。この神殿だけでは殺風景だから、柱の間にギリシャ彫刻を配したらどうか。円盤投げとやり投げの像。一人は本間宏君で、もう一人に二年生の、目鼻立ちがギリシャ的なものを起用した。毎日海へ通う時の格好をさせて、バケツの水をぶっかけて、使い残しのメリケン粉を振る。これも受けた。ナレーショ

ンは川合弘典君に頼んだのだが「彫刻はあまり動かないように」というギャグを言うためだけに、自分でやればよかったかなと瞬思ったことだった。彼らはそこで20分間不動の姿勢を保った。

時代考証はさておき、聖火が走り、最後は聖火台に点火という段取り。これは作成も、中に入る役も熊谷俊士君。ため息を誘ったランナーが点火を済ませても聖火台から紅の炎が出てこない。どうなっているのかと、目を凝らしてみると、作り物の

(次頁一段目へつづく)



青陵祭の棧敷(1997年)

(前頁よりつづく)
内側から紙を指で破ってそこに口を当ててパクパクしている。煙にまかれて窒息しかかってから、ようやくあやしげな赤い煙が張りぼての口を伝って漂い降りてきたのでした。

戦車競技もうまくでき、兵士と勝利の女神の踊りも一糸乱れず終了してわが連合の出し物は自他共に認めるその日最高のものだったのですが、私たちは負けました。正確に言うると失格。理由は金の使いすぎです。これは事実らしくて(伝聞ですから断言できませんが)、抗議できませんでした。敦井栄一君は厳しい会計係で、各部門で要求してくる費用については、精密な予算書を提出させたいので、半紙一枚でも余分なもの、無駄なものを出してくれませんか。その反面、いい企画、どうしても必要と思われる物品についてはいくらでも要求どおりに自分のお金を出した。その結果、予算額の倍額を使ってしまった、というのですが。

ただ、優勝した出し物がパネルで囲いこんだ中でかぐや姫の劇をやった連合だと知ったときには断固抗議をした。審査員の中央高校の生徒におもねた偏向した出し物で、仮装の趣旨にそぐわない、と。実際、正面の一

般観客にはともかく、枚数に座っている生徒には見えないものだったのですから。

仮装は失格ですが、他の部門が頑張ってくれて我々の連合は総合優勝しました。何やかやでアンパンは七個。総合優勝のパンが一番大きくて立派でした。

越路会館で優勝祝賀コンパをしていると生徒会執行部の連中が飛んできて、計算違いで総合優勝は間違いだ、という。我々としても簡単には引き下がれなかったけれど、結局折れて、パンを一個返しました。ただし、大きいのはもう食べた後。

私が職員席で青陵祭を観るようになってからほとんど毎年計算違いがあります。責任者が閉会式の壇上で泣いて謝ったり。私は少しも驚かない。むしろ、最後の余興として生徒会で意図的に計算を狂わせているのではないかと思ったりしている。いっそ、そのくらいでいいのだとも思っている。もともと36年前のあの時、逆に後から総合優勝だといわれた立場だったとしたら、生徒会の失態を無事に認めていたかどうかは疑問だが。

円盤投げの彫刻の円盤には用務員室の大ヤカンのフタを借りた。それが返そうと思っても見当たらない。彫刻の二人はさっさとメリケン粉を落としに海へ

いってしまっただし。もたもたして何分かつたってグラウンドへ戻ってみると神殿が跡形もない。わが連合の仮装はそれで永遠に地上から姿を消しました。

本年度の青陵祭も先日無事に終了しました。実は、この稿は「青陵祭今昔」ということで、現在との対比で書け、という命であった。うまく結び付けられませんでした。

まず、自分の青陵祭があること。それが「ザ・青陵祭」であって、他の年のものを受けつけません。職員として、何年も続けて観て、客観的に比較・批評するには特別な技術が必要とします。

今年がグラウンドが狭くなりまして、私はむしろ親近感もって観ることができました。私たちのころの広さに近かったからです。

違い、というか、変わってきている点を一言でいうと、洗練されてきた、ということだと思えます。私達の頃の未分化な仮装が、一糸乱れぬマスメームに進化しました。ひとつには規制が増えた。例えば枚数は我々の時代バラバラですから、竹竿を立てた連合はその曲がり具合を逆手にとって、中世の城にしたりしました。実にリアルなものが出

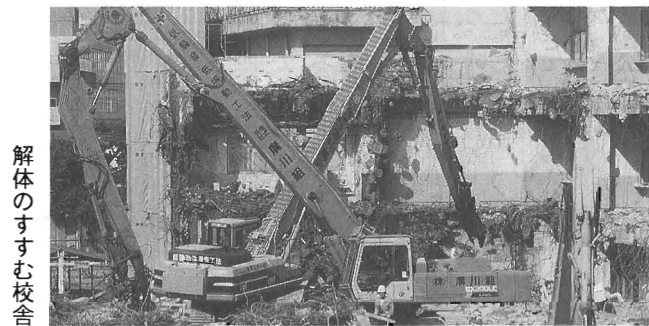
現して感心したものです。今は全部同一規格の絵ですから、中身で勝負するしかない。連合創りも同じ。創作ダンスのプロの目が必要になるような。ただ、そういう中でも「赤とんぼ賞」「赤飛夢慕賞」は競技を除く全ての部門で区別なく審査され、著しく独創性に富み、強烈なインパクトと多大なる感動を与えた連合に贈られます。この名前の由来は、昭和48年の10連合の連合創造「宇宙決戦嗚呼赤飛夢慕」が独創性に富み過ぎた点が評価されなかったため、連合長がトロフィーを購入し、特別賞の設置を求めたところにあります。のように、型にとらわれない自由な発想の芽が生き続けているから、洗練されすぎてマネリ化しているといえなくもない現状が変化していくのも遠い先ではないはずですが。

うまく説明できた自信がありません。私の個人的な記憶を引っ張り出してみただけなのですが、そのことに関してだけでも反論がありそうな気がします。「ただの運動会」なのか、「ケンタカにしかない名物行事」なのか、あるいはそんなふうを意識することがそもそもままちがっているのか。

結論として、「一体どんなもんだか」は、来て、観て、もら

うしかりません。できれば何年間も通して。更にできれば準備段階の最初から。で、会長さん、来年もよろしくお願いいたします。忘れずに案内状も出すようにいたしますので。

母校での
教育実習
101回 井澤美雪



解体のすすむ校舎



プレハブ校舎

(前頁よりつづく)

実習できる喜びをかみしめたものでした。

母校は今

しかし、そんな環境の中でも必死に耳を傾け、授業に取り組みもうとする生徒たちの姿を目の当たりにすると、私たちも自然と授業の準備に力が入りました。実際に教壇に立ってみて、何よりも感じたことは、高校時代当然のように受けていた授業が、どれ程の思いで私たちに向けられていたのか、ということでした。分かりやすい説明、整然とした構成、どんな質問にも即座に答えて下さった先生方……。

自分が教えるという立場に立って初めて、先生方の御苦労の一端が分かったように思います。生徒たちは、毎日、青陵祭の準備で忙しそうで、私たちもその活気を懐かしみながら教壇に立っていました。プレハブ校舎が建ったため、グラウンドは狭くなってしまいました。練習や連合創造に取り組む生徒の真剣さは変わりません。遅くまでの準備で疲れきっているはずなのに、授業にはしっかりと臨む生徒のため、私たちも皆、連日遅くまで学校に残り、教材に関しての議論をたたかわせ、家に帰っても夜遅くまで授業の準備に励みました。

そんな必死な思いが、生徒にも伝わったのか、非常に協力的に授業を受けてくれて、母校で



これから、母校での教育実習の貴重な経験をいろいろな場面で役立てていきたいと思えます。そして、新校舎が完成したときに、再び母校を訪れようと思っています。

「こんな授業をしてみたい」という私たちの欲求を受けとめて下さり、貴重な経験をさせてくれたうえ、厳しくも温かい御指導を丁寧にして下さった先生方には、感謝の気持ちで一杯です。そして、常に生徒の自主性を重んじ、陰ながら支えて下さった先生方の御指導が高校時代と全く変わらないことに感激致しました。

「こんな授業をしてみたい」という私たちの欲求を受けとめて下さり、貴重な経験をさせてくれたうえ、厳しくも温かい御指導を丁寧にして下さった先生方には、感謝の気持ちで一杯です。そして、常に生徒の自主性を重んじ、陰ながら支えて下さった先生方の御指導が高校時代と全く変わらないことに感激致しました。

少々不意を突かれたというのが

全体計画にはもちろん入っていたのですが、多分最後になるだろうと予測していたので、

幸に、多目的空間に机イスを持ち込んだり、トイレにカーテンを付けて薄さをカバーしたり、様々な工夫がなされ、少しでも住みよくしようという配慮は皆でしています。この調子なら大丈夫だと思えます。

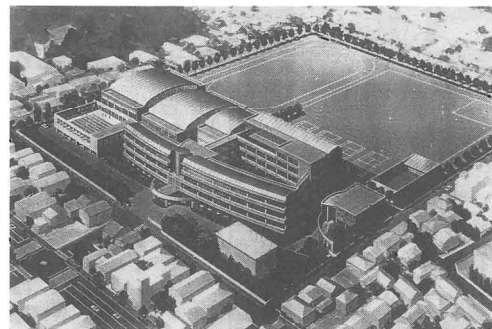
予定の二年間を(コンクリートの建物に比して)ペナペナした感じが中の住人の精神面に悪影響を与えないように注意しつつ、無事に過ごしていきたいものだと思えます。

調べてきた資料はありません。なにしろ、なぜ殊更男女別を気にしなければいけないのか、という意見が出てくる時代ですから……確かに、男女の数が逆転するものも、そう遠くない、と思われる。次に現有勢力の数字を揚げておきます。それぞれご判断ください。

○プレハブ生活がいよいよ始まりました。本来、新校舎建設中の緊急避難的な意味が中心だったわけですが、できたての頃は明るくきれいな外観に惑わされて、もう新校舎は建てなくてもこれでいい、という声すら聞かれました。入ってみれば、所詮プレハブはプレハブ、薄い、揺れる、聞こえる。やはり長く住む所ではなさそうです。

○最近の子の数が減っているんじゃないか、という質問があります。そうだと思います。ただ普段ずつと校内にいるとそれ程気になりません。特に長年調べてきた資料はありません。

	男子	女子	全体
一年生	234人 57.5%	173人 42.5%	407人
二年生	237人 60.0%	158人 40.0%	395人
三年生	243人 54.9%	200人 45.1%	443人



新校舎 完成予想図



平成九年度 大学入試結果

今春、全日制を卒業し、青山同窓会に入会しました新入会員は四四一名で、昨年より三九名の減でしたが、これは定員減からくるものです。その進路先は大学等進学者が二六三名、浪人者一七八名となりました。この結果、進学率が五九・六%となり、昨年の五五・四%をかなり上回りました。

さて、今春の入試結果の特徴を述べてみます。

〈国立大学〉
まず難関国立大学への合格が、東京大(昨年一四)、東北大(昨年四〇)は減ったものの、京大(昨年一〇)、東工大(昨年六)が増え、全体としては昨年に続き健闘したとみて良いと思われま。特に京都大学は現役生が一〇名と近年にない大勢の合格でした。表1にみられますように、本校の生徒、特に現役生は「入りたい大学」を目ざして難関大学へチャレンジをする傾向が著しいと思われま。また、この表1からはわかりませんが難関国立大学医学部を旨とする生徒も多く、今春は二七名が合格しています。表2

(次頁一段目へつづく)

〈表 1〉平成 9 年度入試
主な大学合格者数

公立	合格者数	私立	合格者数
北海道	112(74)	早稲田	40(22)
旭川	16(9)	慶応義	21(9)
弘前		中央治	40(12)
岩手	1(1)	教政本	27(4)
宮城	31(24)	学院科	15(5)
秋田	1(1)	山学理	25(4)
山形	2()	京治医	31(5)
福島	1(1)	青東自	10(4)
茨城	1(1)	獨千亜	29(15)
茨城	1(1)	葉工細	45(17)
筑波	8(6)	千亜学	()
群馬	6(4)	北国 I	11(2)
千代田	5(3)	駒芝昭	2()
東京都	15(10)	成専大	4()
東京	9(6)	津東	6(2)
東京	5(4)	東田	4()
東京	2(1)	経女薬	2(2)
東京	10(8)	本女学	8(3)
東京	1(1)	治奈志	2()
東京	4(3)	神同立	8(2)
東京	3()	関近	3()
東京	6(3)	の	9(1)
東京	9(7)	計	1()
東京	()		7(6)
東京	2(1)		8(2)
東京	1(1)		1(1)
東京	6(5)		12(5)
東京	3()		3()
東京	1()		6()
東京	6(4)		10(3)
東京	2(1)		()
東京	14(10)		17(4)
東京	3(2)		9(1)
東京	()		17(10)
東京	3(3)		55(17)
東京	1(1)		3()
東京	1(1)		2()
東京	1(1)		136(42)
東京	()		647(200)
東京	4(1)		() 現役
東京	2(1)		
東京	2(2)		
東京	12()		
計	312(200)		

(前頁よりつづく)
は進学先進県といわれる富山県、群馬県をはじめとする近県と県内の進学校との、難関国公立大学の合格者数を比較したものです。東京大学の合格者は、群馬県、富山県勢に及びませんが、東京大学と京都大学の合計では遜色のないことがわかります。東京大学の合格者数が進学校としての名前を世に出すことになるといっていいこともありますが、来年度からは一〇名以上の安定した東京大学合格者を出したいと思っています。次に、北大、東北大、東工大、一橋大といった難関大学へは本校が圧倒的に強いことがわかります。こ

の表 2 の八六名に先の国公立大の表 2 の二七名を加えると、本校生徒の層の厚さが実感してもらえらると思います。近年、難関大学への合格は以前に比べてかなり良くなってきていると思われまます。地元大学の新潟大学は一二名で昨年より二名減ですが、受験者の減少からすると昨年よりは善戦しているといえます。

〈私立大学〉
本校生の私立大学受験は年々減少しています。昨年の現役の平均出願校数は一・七校、今年は一・六校で、実質受験校平均は一・四校でした。現役受験者の五割以上が国公立大学受験一本です。県内・県外の進学校か

らは考えられない程の少ない受験者です。国公立大学志向が強まった現在でも現役の私立大学出願校平均は三・四校といわれまますので、本校がいかにか少ないかがわかります。さて、出願校数は減ったものの現役の合格者延数は二〇〇名(昨年一七六名)と昨年より増えています。現浪合わせて六七四名(昨年六三五名)で、昨年度を上回ったのは現役の活躍が大であったといえましよう。しかし、内容は早稲田大学(昨年五九名)、慶応義塾大学(昨年三六名)の難関関大で合格者をかかなり減らしていることを反省しなければなら

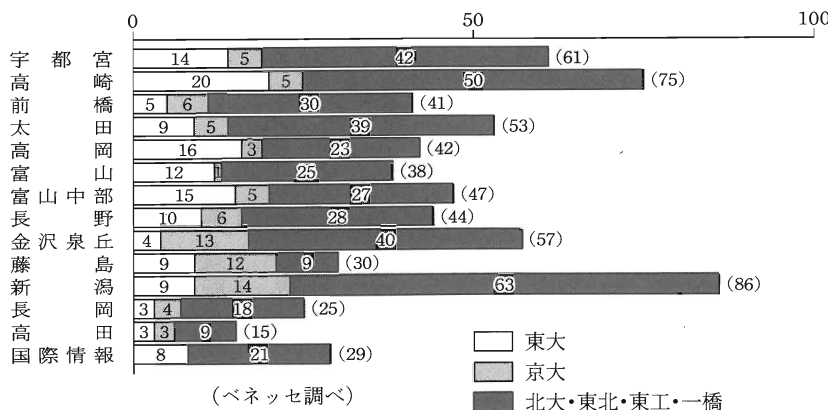
本校は昔から文武両道を掲げ、また進学では「入れる大学より入りたい大学へ」を進路の指針としてきました。そのため、難関大学をみざす生徒が多い反面浪人生も多くなるのが例年の傾向でした。今年はこの点はやや改善されたもののまだ依然として多く、「入れる大学」へも不合格者を出しているという批判に謙虚に耳を傾けなければなら

ません。時代も生徒も、そして校舎も新しく変化しつつあります。二十一世紀を担う新しい人材を作り出すという観点を明確にしながら一層進路指導を充実させていかなければならないと肝に銘じています。

今後とも同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

(進路指導部長 岡村卓二)

〈表 2〉近県の進学校における
難関国公立大学合格者数比較(97年度)



- (ベネッセ調べ)
- 個人
 - 男子 400 m
 - メドレーリレー
 - 4 位(齋藤・高橋・山田・宮内)
 - 100 m 平泳ぎ
 - 200 m 平泳ぎ
 - 200 m 平泳ぎ
 - 5 位
 - 100 m 背泳ぎ
 - 200 m 背泳ぎ
 - 5 位
 - 高橋洋平
 - 女子 400 m
 - メドレーリレー
 - 4 位(齋藤・佐野・山内)
- (次頁一段目へつづく)

後輩の活躍

平成 9 年度新潟県総合体育大会
成績一覧表

- 1 陸上競技部
- 個人
- 男子 800 m
- 1 位 荒城信介
- 8 位 坂井岳夫
- 1600 M R
- 2 位 高橋哲也、坂井岳夫
- 小林耕士、荒城信介
- 女子 800 m
- 5 位 長谷川仁子
- 2 体操部(不出場)
- 3 水泳部
- 団体
- 男子 8 位
- 女子 5 位

(前頁よりつづく)

第 3 位

14 柔道部

1000m バタフライ 3 位

2000m バタフライ 5 位

齋藤美穂

1000m 背泳ぎ 6 位

佐野真理絵

4 男子バスケットボール部

2 回戦敗退

5 女子バスケットボール部

1 回戦敗退

6 男子バレーボール部

3 回戦敗退

7 女子バレーボール部

2 回戦敗退

8 ソフトテニス部

男子 3 回戦敗退

女子 3 回戦敗退

個人

男子 4 回戦敗退

吉井貴志・富岡郁夫組

女子 3 回戦敗退

岡本景子・伊藤裕美組

9 卓球部

2 回戦敗退

10 野球部

ベスト 16 1 回戦敗退

11 バドミントン部

男子 3 回戦敗退

女子 ベスト 16

12 サッカー部

予選敗退

13 ラグビー部

19 フェンシング部

団体

男子 2 位 女子 2 位

個人

男子

フルール

2 位 加藤雄亮

5 位 北見 光

エペ

3 位 寺尾正明

4 位 加藤雄亮

5 位 小池上芳彦

サーブル

4 位 北見 光

5 位 近藤裕介

6 位 伊丹晃

女子

フルール

3 位 近 聖子

4 位 今井明香

6 位 林真理子

エペ

5 位 林真理子

20 ボート部

男子 総合 3 位

女子 総合 2 位

男子 ナックルフォア

女子 ダブルスカル

(沢田・木島) 組 2 位

21 空手道部

団体 女子 型 4 位

個人 男子 型 4 位

三浦琢磨

女子 型 6 位

吉田千絵

22 弓道部

団体

男子 23 チーム中 18 位

女子 21 チーム中 20 位

平成 9 年度北信越高等学校体育大会成績一覧表

陸上競技部

男子 800m

第 3 位 1,52.35

荒城信介

女子 800m

準決勝進出

長谷川仁子

男子 4x400m R

予選敗退

フェンシング部

女子 フルール ベスト 8

近 聖子

男子 フルール 1 回戦敗退

加藤雄亮

空手道部

男子 個人 型 5 位

三浦琢磨

女子 個人 型 予選敗退

吉田千絵

女子 団体 型 予選敗退

吉田千絵

田中純子

甲野朱美

平成 9 年度全国高等学校体育大会出場者

陸上競技部

男子 800m

荒城信介

フェンシング部

男子 フルール 加藤雄亮

渡辺史子・藤木央子・五十嵐倫子

平成 9 年度新潟県高等学校春季囲碁大会

個人戦

A ブロック 優勝 宮村心平

2 位 廣田 充

B ブロック 2 位 塚田 健

3 位 藤木央子

廣田 充・塚崎 孝・小池 仁

C ブロック 優勝 九貫 智

D ブロック 2 位 竹内慎作

ハイティーン水泳

新中・新高(25)

60 回 平田大六

44 超特訓

一九五〇年八月、故郷の関川村でのわずかの休暇のあと、ブルへもどつてみると、すでに大黒善弥(50回)監督が待っていた。第 2 回北日本高等学校水上選手権大会、実質的には、国体の県予選会になるのだが、それまでにはもう二〇日間くらいしかないのだ。

猛練習がはじまった。大黒監督は、この時、途中のラップタイムをきびしく管理された。例えば千五百メートルを泳ぐのに途中の百毎のタイムを指定し、それより遅く通過すれば容赦なくやめさせてプールからひきあげ、やりなおしをさせた。

それをアンコールと云う。そして、「競(せ)つたら、必ず勝つ平田に仕上げてやる！」大黒監督の言葉である。

競り合いの練習だ。私の仲間を数メートル先にスタートさせ、それを私に追わせるのだ。負けたほうがアンコールらろ！その声におのき相手の水跡を追ってゆく。どちらも必死なのだ。

やがて大黒監督は、途方もない方法を考案された。それは、私に八百メートルを泳がせて、四人のリレー組と対決させるのだ。やつと追いついたときに、相手は次の選手にタッチする、また離される、ぬき返す、次の選手がまたザボンとスタートしてむかってくる。

(次頁一段目へつづく)

(前頁よりつづく)

私もズルくなる。相手の四人の選手のオーダーがわかるから、息をぬく場所もおよそ見当がつく。そのことが大黒監督にバレてしまい、こんどは、四人のオーダーを知らされないままに私は泳がせられた。並んで泳いでいる相手の素性がわからない。それでも、水中での手の形や足の曲げ方で、およそ相手の見当はついたものだった。

これはすべて、「デッドヒートの平田」を育てあげる大黒監督の方策だった。

45 予選のラップを読む

大会の日。会場は新潟商業高校だ。私にとっては、構造上最も泳ぎにくいプールのひとつである。

私がターゲットにしぼっていた佐渡高校の武田大司選手は、一か月ほど前の長岡悠久山プールで争った時よりも、一まわりもたくましい体になっていた。

ふりかえってみると、私の水泳選手としての生涯で、この時ほどの大接戦はなかった。私の日記に、武田と私のラップタイムが残されている。こんなに詳しい記録のあるのは、この日の分のページだけだ。

武田と私は予選は別々の組だ。専門的になるがそのまま書き写してみる。(武田/平田)で単位は分・秒となる。

「八百メートル」一〇〇(1・13/1・15)二〇〇(2・34/2・36)四〇〇(5・28/5・28)六〇〇(7・23/7・12)八〇〇(11・15/11・07)「四百メートル」一〇〇(1・10/1・15)二〇〇(2・32/2・36)三〇〇(3・57/3・58)四〇〇(5・20/5・19)

これが七月二日大会二日目のお互いの予選の記録だ。詳細に見ると、武田選手は、スタートダッシュでまずとびだしている。そして、八百でも四百でも、四分の三位のところ私が追いつき、ゴール直前でリードする、というパターンになっている。

これだけのデータを見れば、武田選手は後半に弱い。フルマラソンで云えば35キロあたりが勝負どころか。しかし、予選はお互いに別組で、それぞれ独泳に近かったので、武田選手は、後半力を抜いたのかもしれない。

それでも私はその夜、気持ちの上では、予選のデータをもとにした作戦を一応はたてていた。それが、二三日の決勝本番では、想像もしていなかったレース展開になるのである。

(つづく)

同窓生がやっているお店紹介

『こんな店、行きたい!!』シリーズ

タイ料理「蘭タイ」

91期(1983年卒)・藤井祐子さん

(新潟市西堀前通9 TEL 228-2133)

行きたい店のマスターやママと話をしていたら、実は同窓生だった……なんて経験ありますね。「同窓生のお店」を積極的に紹介していこうというこのシリーズ、皆さまからの情報もお待ちしています。

さて、第一陣は、新潟では意外に少ないエスニック料理の店「蘭タイ」。常務の藤井さんは、高校・大学を卒業後、日本航空へ入社。国際線スチュワーデス時代の一番の楽しみがバンコク・フライトで、まさにタイ料理にハマってしまい、ついに、「食べる側」から「作る側」に。友人たちから食べてもらう喜びが分かってきた頃体調を崩し、新潟に戻ってお店をやるうと決めました。しかし、周囲からは「素人には無理」とことごとく反対されたとか。

お母様とお姉様の協力を得て開店してから今年で四年目。「きちんとした物を感じよく提供できれば」と今でも月に何回かはタイ人の先生に学んでいる。ロコミとパブリシティ(マスコミ取材)でお客さまが広がり、「週末は予約をしていた方がいいが確実です」というほどファンがついている。店内はテーブル席、カウンター、小座敷を合わせて二十六席。おすすめはタイ料理の代表トムヤンクン(海老の辛いスープ)一〇〇円とトーマンプラー(タイ風さつま揚げ)七〇〇円。エスニックの代表的調味料ナンプラー(魚醤)の風味が絶品。辛いのはチョット……というかたは、メニューの唐ガラン表示を目安に辛くない料理を選んでいただければ大丈夫。

藤井さん曰く、「男性よりも特に若い女性のほうが辛い料理は好きですね。最初は少しずつ、種類を多く召し上がってみて下さい。」二五〇〇円からコースあり。王様コースは三八〇〇円(要予約)。シンハ・ビール等のタイのアルコール類も面白い。この青山同窓会報を持参されたかたにはタイ風ゴマ団子一ケサービス。

最後に「全員美人スタッフと書いていいですか?」と聞いたらにらまれてしまった(でも本当)。夏を待たずに行きたいお店、是非!!

PM 6:30 ~ PM 11:00
ラストオーダー PM 10:15
日・祭日休み

最後に「全員美人スタッフと

**82期3年1組同級会
同級会のお知らせ**

期 日 8月12日(火) 18:00~

場 所 如庵 (TEL 025-223-5515)

会 費 6,000円程度

連絡先 025-265-3196 (小林宅まで)

※3年1組以外の参加者も歓迎します。



**65期(1957年3月卒業)
卒業40周年
同期会案内**

と き:平成9年9月20日(土)
午後6:00

と ころ:新潟イタリア軒

**青山同窓会
編集委員会**

会報の作成のために、左記の方々に編集委員をお願いいたします。楽しく読んでいただける会報を作成すべく、毎号の企画を立て、取材したり、寄稿を依頼したり、編集したりしています。会員の皆様からも編集委員宛てに、企画や、会員に関するニュース、消息、慶弔、クラス会報告、予告、クラブOB会報告、予告などお知らせください。会報の読後感想などもお寄せください。

編集委員
上村光司会長50回、石田瑞穂幹事長67回、山田 栄校内幹事69回、戸松秀雄67回、池主憲夫68回、中野 久71回、斎藤繁夫校内幹事77回、田辺重幸77回、石井智裕79回、阿部哲夫80回、小林しおり82回、高橋建造84回

編集後記に代えて

五月二十日、夜六時過ぎ、市内某所に美女二人、オジさん八人が集まった。恒例の同窓会報編集委員会である。

ビールで喉を湿らせて、結構真面目に編集会議が始まる。上村会長・石田幹事長・山田校内幹事らを中心に、活発な意見が飛び交う。

一、高橋是成先生への追悼文が前号に間に合わなかった。今回は必ず載せよう。〈全員静かに頷く。〉

二、同窓職員が現在十七名。非常勤講師の関根彰圓先生(59回)から89回の灰野正宏先生まで、広い年齢層だ。年に一回、同窓職員の紹介をしらとうだい。〈ビールの追加〉

三、今春の異動でご退職になった土屋信之先生(63回)、新しく赴任された坂井政行教頭先生(70回)、同じく通信制に赴任された片桐靖孝先生(68回)の三先生から寄稿してもらおうや。〈「日本酒も」の声。〉

四、最近の入学者の男女比率はどうなってるんだい。随分女子が増えたとか聞くぞ。こんなことも載せたっていいじゃないのかなあ。(そろそろ危ない)



校内編集委員S生(77回)記

五、そう言や、青陵祭はどうすんの。狭いグラウンドでやるんかいなあ。俺達の頃と同じやり方かい今でも。〈校内幹事より説明〉そりゃあ駄目だ。面白くないよ。俺達の頃のやり方を現在の生徒に教えようぜ。〈「そうだそうだ」の声。〉生徒を煽ってさあ、昔みたいなパンカラにさせようぜえ。〈「教育に口だしていいんかなあ」の声。話題が変わる。〉

六、青山同窓ママの店紹介コーナーってのどう?取材に行ったりしてさあ。(やはり今回も出た!)

七、Sさん、あんた、編集後記書いてよ。毎回書くことなくってさあ。(おおっ)

〈時計は八時を回る。〉

「Sさん、じゃあ今回もこの会議の内容、まとめてね。ファックスでいいから。あとで。送って。じゃあ。はは。」

かくして、今回もカオスのうちに編集委員会は終わるのだった。

平成八年度 青山同窓会会費納入者追加分

(12月中旬より3月までに納入のもの)

納入先

(郵便振替口座 00650-7-4455 青山同窓会)

39回	54・55回	61回	67回	風間雄一	83回
大野賢二	青木正作	金子章	阿部堯	関憲一郎	片岡幹博
41回	大塚久雄	川崎栄一	68回	竹内裕義	本間憲之
岩原和夫	星原賢二	62回	斉藤秀夫	土屋彰彦	84回
46回	56回	木村亮	関隆二	永井明彦	川村伸二
伊狩章	伊藤泰夫	近藤琢也	高野達雄	75回	霜鳥友子
47回	伊藤信敬	佐野良作	古館信生	味方耕一郎	松崎清司
48回	建部恒彦	野徳義介	吉原正博	加藤正広	85回
五十嵐皓太	田中孝昌	藤巻圭三	69回	坂元静一	高野裕久
49回	三上昌男	山野陸夫	笠原弘康	佐藤広志	渡辺毅
滝沢信義	皆川行一	三浦愛三	里村友介	鈴木修	86回
滝旗杏洲	山部義一	山崎敬介	長浜功三	三富	鈴木正孝
51回	58回	63回	平林高明	76回	高橋俊吾
坪井清秀	森岡哲朗	岡崎勇二	山崎高	斉藤治	88回
藤島武雄	諸橋新夫	小林俊雄	70回	佐藤哲治	根本智子
52回	早川哲夫	櫻井晃一	坂井政行	77回	89回
齐藤稔隆	早澤良雄	川正一	柴田忠臣	石川鋭一	渡辺綾子
古川幸夫	59回	64回	鈴木信樹	78回	90回
53・54回	渡辺初男	土屋利之	西本正樹	敦井実樹	五百川浩
阿部靖朗	60回	65回	森井滋	水野秀樹	
児玉保彦	上杉雅一	北村剛	71回	村田光男	
高橋勝彦	小林賢男	曾我義彦	中村健三郎	79回	
坪川一郎	高橋明男	南場良博	野沢坦	浅井敬一	
中島常雄	高橋正彦	宮川忠和	石田武威	齐藤英幸	
中村正彦	丸山敏栄	村山黄三郎	山本俊介	吉田英	
野口俊作	吉田	山田誠之輔	72回	菊池隆宣	
平木利弘		66回	石田庄二	杵淵	
		67回	熊谷忠脩	81回	
		68回	鈴木理子	荒川洋司	
		69回	三野修	丸山晋	
		70回		82回	
		71回		荒川育子	
		72回		石崎清	
		73回			
		74回			